みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

結論と展望：なおも，〈生きられる場〉を穿つために：ネオリベラリズムに抗する〈生きられる文化〉の創造：覚え書き・後背地論からみたストリート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 年晴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001218

結論と展望

——なおも，〈生きられる場〉を穿つために

関根康正編『ストリートの人類学』下巻
国立民族学博物館調査報告　81：465−488（2009）

ネオリベラリズムに抗する〈生きられる文化〉の創造

覚え書き・後背地論からみたストリート

阿部　年晴
埼玉大学

ストリートは地域社会の存立の必然的契機であり基底である。ストリートは地域社会にとって共―公性，媒介性，超越性を帯びた空間であり，成員にとって，両義性，他性，創造性を経験する場である。それぞれの社会の人びとがストリートとどのようにかかわり，ストリートをどのように生きたかは，ストリートの習俗からも知ることができる。近代において，ストリートは，近代システムの支配の下で変容して，本来の意味や機能のある部分を弱体化した。そうした部分を回復するための拠点のひとつは，ストリートが後背地や生活と出会う機会と場所である。ストリートの人類学の課題は，そこでのフィールドワークに基づいて，各レベルの地域社会と人間にとってストリートが持つ多面的な意味の認識をさらに深め，ストリートがその意味や機能や可能性をよりよく発揮するために何が必要かを明かにすることだ。

1　はじめに
2「後背地」という観点
　――人類史の１つの見方
　2.1.　人類史における共住集団―小地域社会
　2.2.　都市文明と小地域社会
　2.3.　近代文明と小地域社会
3　後背地論からみたストリート
　3.1.「後背地」とストリート
　3.2.　ストリートの習俗
　　――ストリートを生きる
　3.3.　人間とストリート
4　ストリートの可能性
　4.1.　後背地を超えて――都市
　4.2.　ストリートの変容――近代
　4.3.　システムを超えて
　　――ストリートの可能性
5　おわりに

キーワード：後背地，基底性，ストリートの習俗，都市，近代システム，ストリートの可能性

1　はじめに

〈人類史の地平へ〉

関根康正は，「ケガレ」や「都市的なるもの」を探究するなかでストリートという主題に遭遇した次第を次のように述べている。本章の出発点なので，すこし長くなるが，

引用しておきたい。「民族文化の知恵としての「ケガレ」の創造性を切り出す仕事を行った後に……次に当然向きあわなければならないのは，そうした民族文化の宿す深い実存的意義をいかにして疾走する消費資本主義の現代社会に接続するかという困難な課題である。……この課題を考える場所は，従来人類学が向かいがちな反都市的な場所ではなく，まさに都市の最前線でなければならなかった」（関根 2005: 15）。関根は，南インドの大都市チェンナイの歩道空間において，この「最前線」に遭遇した。「そこは，都市空間の内部に確かに存在するのに，外部性を帯びているという逆説を演じている。そこに境界すなわちヘテロトピアが現出していて，無意識のうちに反都市計画，反ユートピアの実践場となっている。」（関根 2005: 18）。そして，次のような認識のもとに「ストリートの人類学」を立ち上げた。「肥大する近代の共同体幻想によって押し込められた所（かつ，その幻想が破綻する場所）に，普遍的な人間の生の深奥を喚起するヘテロトピアが地下水脈のように拡がっている。そこでは，「偶然」を排除することに熱心な定住幻想の中の私たちもまた実は皆危うい生を生きるウカレビト（浮浪人）なのだという事実が露出する」（関根 2005: 19）。

関根の指摘を受けて，改めて人類史の地平にストリート[1]を置いてみると，ここで述べられていることは，現代都市のストリートだけのものではなく，人類史とともに古い「ストリートなるもの」の限りなく多様なあり方と響き合うように思われる。熱帯雨林に点在する狩猟民のキャンプのまだ新しい踏み跡も，サバンナの村々を結ぶ一筋の細いストリートも，高度消費社会の村落のストリートも，すくなくとも潜在的にはこのような性質をもっている。小さなサンゴ島の集落で，ストリートと呼べるようなものが見られない場合でも，海岸（波打ち際）が「ストリート的な」役割を果たしていて，そこで人々が来訪者を迎えたり，若者たちが群れて時間を過したりするという[2]。ここでも集落は，「ストリート的な」空間を含んでいると考えてよいだろう。

「ストリート（的空間）」なしには，人間の生活空間が存立できないだけでなく，そもそも「人間」自体が存立できない（和辻 2007: 234–250）。この認識が本章の出発点になる。この認識を持って，いったん現代都市から遠ざかり，世界各地の草の根――人類社会の基層をなす共住集団――へと赴くと，時空の広がりのなかで大小さまざまなストリートが響き合い，根源的経験としての「ストリート経験」を呼び覚ます。そこで得られたストリート像を光源にして逆照射すると，近代システム（国家と市場経済とテクノロジー）が制覇しているかに見える現代都市のストリートにも，人類史を貫く「ストリート的なるもの」が脈打っているのを透視できる。ストリートは，常に「前衛」の場であると同時に，生活空間のもっとも身近な基底であるから，ストリートで何が起こりつつあるのか，ストリートがどのような空間になろうとしているのかを問うことは，私たちの実存のあり方，私たちが生きる世界のあり方をラディカルに問うことでもある。

本章では，「後背地論」（人類史の１つの見方）の立場に立って，「ストリート的なる

もの」の仮説的モデルを提示し，次に，そのモデルに基づいて，現代社会のストリートのあり方を考察してみたい。論証や検証は別の機会に譲って，アイデイアの概略だけを述べるものなので，章題は「覚え書き」とした。問題提起の文章として読んでいただければ幸いである。

2「後背地」という観点——人類史の1つの見方[3)]

2.1. 人類史における共住集団—小地域社会

〈人類の揺籃としての共住集団—小地域社会〉

人類形成史を振り返ると，人類は，「持続的な対面関係が優勢な家族的集団や近隣集団を核とする共住集団—小地域社会」とそれらが形づくる関係の中で文化的動物としての人類となり，人類でありつづけた。本章では，この「共住集団—小地域社会」を「後背地」と呼ぶ。人類が人類になる過程とは，1つの生物種（ヒト）が，自己と自己の内外の自然とをしだいに文化化し，文化環境を拡大再生産するとともに，文化への依存度を高めて，ついには自らを文化なしには生きられない存在（人間）に作り上げる過程である。この過程はいまなお進行中であるが，基礎的な部分は，「共住集団—小地域社会」（後背地）の生活においてすでに達成されていると思われる。

ここでは共住集団＝小地域社会（後背地）の共同生活の2つの側面に注目しておきたい。その1つは，人間における文化と自然の関係にかかわる。人類形成史は，人類が，共住集団＝小地域社会の共同生活の中で，自己の内外の自然，すなわち内なる自然としてのヒト（の心身）と外なる自然環境との「直接的な」対話と相互作用を通じて，文化を，他の霊長類と共通の萌芽的なものからしだいに発達させて，人類独自の文化の基本的な部分を作り上げた過程である。それはまた，人類が文化的動物として自己を形成する過程でもあった。文化の基本的な部分は，人類が内外の自然との「直接的な」対話と相互作用によって形成したものであり，自然史に深く根ざしている。だが同時に，文化は，自然から離反するベクトルを内在させており，しかも，人類が次第に文化への依存度を高める方向へと進化してきたのも事実なのだ。人間存在の謎は，人間と文化をめぐるこの錯綜した事態から生まれる。言い換えれば，人間存在の謎は自然と文化の関係のうちにこそある。

2つ目は，共住集団—小地域社会における人間の営みの特徴にかかわる。共住集団—小地域社会においては，人間が人間として生きるうえでほんとうに必要なことを実現するために，当事者が当事者として当事者のために共同で努力する。「人間的生が直面する基本的な問題」のすべてに，当事者が当事者として当事者のために共同で取り組み，自前で解決する。このような営みよって生み出され共有され伝承されると同時にそのような営みを可能にしている生活の仕方（生き方）を「習俗」と呼ぶことにしよう。習俗

は，後背地の日常生活の中で形成され伝承される観念と行動様式の束である。広義の「文化」のうち，日々の生活の仕方にかかわる部分だと言ってもよい。たとえ文明社会の都市中枢に由来するものであっても，人々の生活の一部になったものは，習俗としての性質を帯びる。人間の生活は習俗によって成り立っているのであり，もちろん現代社会にも習俗はある。

習俗について幾つかの点を確認しておこう。習俗は人類と共に古い。共住集団―小地域社会が習俗を形成し，習俗が共住集団―小地域社会を形成する相互形成の過程は，「人類」生成のプロセスそのものでもあった。習俗の起源を求めようとしても，自然史の中に迷い込んで突き止めることができないが，習俗については，「自然」との連続性と非連続性の両面からか考えなければならない。自然と文化の関係にこそ，人間存在の謎が潜んでいるとすれば，この謎を解く鍵は習俗の中にある。習俗は，ヒトが，文化的存在としての人間になる過程に深く根ざしているだけでなく，いまなお人間が人間であることを可能にし続けてもいる。習俗は人間が「文化的動物としての人間の条件」を生きるための方法なのだ。そのせいか，普遍的な習俗には，タブーやケガレやある種の儀礼（移行儀礼など）のように，文化や「人間の条件」自体を対象とするもの，つまりメタ文化であるものが少なくない。後に詳しく述べるように，ストリートは人間世界に欠かせない基底であるから，当然のことながらストリートを巡る習俗があり，それは「ストリートの人類学」を展開するうえで貴重な手がかりになる。

〈人類社会の基層としての共住集団―小地域社会〉

人類社会の基盤をなす小地域社会は，長い間，相対的に自立的・自律的であったが，けっして閉ざされ固定していたわけではなくて，他の同種の地域社会と交流することによって存立・存続してきた。しかも小地域社会は，それ自身の中から，そしてとりわけ他の地域社会との交流・関係の中から，より大規模な社会や新しいタイプの組織・集団と，それらを活躍の場とする人間類型を生み出す。このようにして次々により大規模な社会やより大きな権力が出現しても，それらは，既存の小地域社会を消滅させるのではなく，影響下に置いたり自分の内に組み込んだりする場合が多い。つまり，既存の社会が蓄積したものを，取捨し，再編し，新しい要素を付け加えるが，人間と社会を再生産するための基本的な機能については，既存の小地域社会に依存してきたのである。人類社会においては，異なるレベルの地域社会や異なる種類の組織はそれぞれ独自の働きや原理をもっていて，他のものの機能を完全に代替することはできない。小地域社会は，より大規模な上位の組織に組み込まれ，その組織との相互作用によって変化しつつも，全体社会の基層部分として，多少とも自律性を保って存在し続け，文化的動物としての人類（人間）を再生産するための基本的な機能を果し続けた。基層社会の変化はゆるやかで，変化しつつも大きな連続性を保つのが普通であるが，その状況は，地域によって

は近代に至るまで続いた。本章では，人類社会のこのような基層を「後背地」と呼ぶことにする。

後背地論は，人類史を，地域社会の分化と重層化の過程としてとらえるのであるが，その過程が物的形態をとったものがストリートにほかならず，そこにおいて後背地論と「ストリートの人類学」が遭遇し交錯するのである。

2.2. 都市文明と小地域社会

〈「後背地」としての共住集団―小地域社会〉

人類史における地域社会のあり方に１つの画期をもたらしたのは，古代都市国家の出現であった。そこでは，後背地に根拠をもつ活動とその外部に根拠をもつ活動との力関係が逆転する。社会的諸機能を集中させた都市的中枢は，自給自足できず，周囲の共住集団―小地域社会の多くを，物資や労働力を供給する「後背地」として支配するようになる。従来，「後背地」という語は，このような経済的政治的関係だけに着目して用いられてきたが，ここで提案したいのは，このような「後背地」概念の内容を拡大するとともに，いわば焦点をずらして用いることである。後背地論からすれば，都市的中枢を拠点とする専門家，知的エリート，官僚などの営みは，人間の可能性の地平を大きく切り拓くが，それ自体では，文化的動物としての人間を再生産することができず，その意味では既存の共住集団―小地域社会が果たしてきた機能を全面的に代替することはできない。つまり，都市的中枢は，物資や労働力のためだけでなく，文化的動物としての人間と社会を再生産するためにも後背地としての地域社会を必要とする。

古代都市文明の成立後も，文明中枢は，ふつうは，後背地に直接働きかけて完全に変質させたり解体したりすることはなく，ある程度の自律性をもたせたままで，それに依存してきた。文明中枢の知的装置やそれを担う知的エリートは，後背地の伝統（習俗）やそれが人間に対して持つ意義を十全には理解できなくても，その重要性には気づいていたようで，長続きする文明は，自己の内外の後背地とその習俗を無闇に破壊するようなことはせず，安定した相互関係を維持していた。それでも，都市文明の成立は，各地の小地域社会が，大きな外的圧力にさらされ，機能のある部分を奪われ変質する歴史の始まりでもあった。

後背地論は，歴史の中で次々に出現する規模や層を異にする組織や活動を，連続性と非連続性の両面から関連づけて捉えるための，特に，基層から上層への影響に光を当てるための認識装置であり，「後背地的なもの」が巨大社会の制度を支えている部分に光を当てるための発見法である。人類社会の基層部分と，そこから派生して巨大化し自律性を帯びる諸制度との間の異質性と緊張関係に注意を向け続けて，「後背地的なもの」も「文明中枢的なもの」も，それだけでは，人間社会として長期にわたって自足できないという事実に基づいて，人間と文化を理解するための道を拓くものである。

2.3. 近代文明[4] と小地域社会

〈「後背地」の解体？〉

国民国家と資本主義とテクノロジーを柱とする近代文明（近代システム）は，文明の特徴のある側面をもっとも先鋭に実現しつつある文明であるが，その近代文明の成立とともに都市的中枢と後背地の関係に大きな変化が生じた。近代文明はあらゆるところに自己の論理を貫徹して例外を認めない。後背地もその影響を逃れられない。近代国民国家は，領域内に住む諸個人を国民として直接掌握しようとして，生活のあらゆる側面を国家の制度とイデオロギーの支配下に置き，原則として例外を認めない。小地域社会も，国家と拮抗する自律的単位としては認められない。市場経済は，草の根のあらゆる場面に浸透する。テクノロジーは自己の論理で説明できないものに対しては存在すら否定する。（たとえば，検出されなければ病気ではない……など。）

従来の諸文明と比較して，近代文明においては都市的中枢の影響は社会のあらゆる部分に浸透し，圧倒的である。後背地としての小地域社会は自律性を失い，変質し，解体に近い状況に置かれることも少なくない。（今日の農山漁村のある部分や，いわゆる郊外を見よ。）やや強い表現になるが，近代文明は，都市の内外，個人の内外において，後背地と後背地が培ったものを食いつぶしつつあると言えよう。「食いつぶす」というのは，人間と社会にとって不可欠な後背地を，必要なときには利用するが，邪魔であれば，容赦なく抑圧したり解体したりするからである。このことは「他性」という観点から考察することもできる。近代文明には，他性を抑圧ないし排除する傾向が内在する。近代文明は他性を処理することが不得手だと言ってもよいだろう。こうした傾向は，後期近代と呼ばれる現代においても，いわゆるグローバリゼーションの中でますます強くなりつつあるようだ。後に述べるように，このことは，他性と深くかかわることを本質とするストリートが近代において遂げる変容とも関連している。いずれにしても，本章で想定しているように，人間が人間であることを支えているのが後背地だとすれば，近代文明は人間が人間であることの基盤を食いつぶす文明だということになる。すくなくとも，人類社会の重層性・多元性をうまく活かせていない成熟途上の文明だということにはなろう。

現代社会のこの素描は，間違ってはいないけれども，このままではいくらか偏っており，また表面的であろう。後背地論的な観点をもってより注意深くアプローチすれば，世界各地で，後背地および後背地的なものがなお強い生命力を有していて，人間生活を支え，また，近代的システムとせめぎ合ったり融合したりしている状況が見えてくる。このせめぎ合いや融合は，現在ではまだ十分な注目を浴びておらず，帰趨も定かでないけれども，文明変容あるいは新しい文明の形成過程の一側面であるかもしれない。この点をさらに解明するのは後背地論の課題であるし，そうした状況の中で，ストリートに，そして，ストリートで，どのようなことが起こりつつあるのかを明らかにするのは，ス

トリートの人類学の課題であろう。

3　後背地論からみたストリート

3.1.「後背地」とストリート

〈基底としてのストリート〉

ストリートは後背地論において中核的かつ特権的な位置を占める。なぜか。ストリートは，後背地の存立の必然的な契機であり基底である。後背地としての集落はストリート（的空間）とともに成立した。たとえかすかな踏み分け道であろうと，ホーム[5]とホームを結ぶストリートができるとともに集落が成立する。むろん，歩くことによってストリートを生み出し，ストリートを歩いてホームとホームを結ぶのは人間である。「道の奇跡，すなわち運動から固定した形態ができあがり，いったんできあがると今度は運動がその固定した形態へと流れこんでいき，ついには固定した形態へと凝固していくというあの道の奇跡」（ジンメル 1999: 92）ストリートは本質的に運動（歩行，移動）と切り離すことができない空間である。後背地は，ホームとストリートの関係によって構成される。ストリートはホームとホームをつなぐ付属部分や補助部分とみなされがちであるが，事態はそのように単純ではない。むしろストリートこそが，ホームをホームたらしめ，地域社会を地域社会たらしめるとも考えられるのだ。ストリートなしには，ホームも地域社会も存立できない。しかし同時に，ストリートもホームなしには意味をなさない。両者は不可分であり相互依存の関係にあるが，互いに異質な空間でもある[6]。異質性は幾つもの点にわたっているが，たとえば次のような点がある。ホームは本質的に誰かに属するが，ストリートは本来誰にも属さないかわりに，すべての人に属する。そのようなものとしてストリートは，すくなくとも潜在的には，ホームを超える「共性」（あるいは「公性」）を帯びている。「フロー」という点では，ホームもストリートもフローの側面を持っているが，両者でその比重がまったく異なる。ホームにおいては滞留が主であるが，ストリートにおいてはフローが主だ。両者は，互いに異質な空間としてほどよい距離を保たなければならない。ホームとストリートの適切な関係は，人間生活にとって基本的な条件のひとつだ。ストリート（的なもの）が過度にホームを侵食したり，逆にストリートがホーム（的なもの）によって過度に支配されるようなことがあれば，ストリートもホームも変質し，無秩序の危険に晒されるだろう。それは，後に見るように，今日私たちが直面している問題だ。

ストリートが結ぶホームとホームの関係は，ごく小さな後背地においてすら，一元的ではない。後背地の基本的な機能は文化的動物としての人間の再生産であるから，インセストタブーが存在する限り，血縁でつながる家族的集団だけが永続的に孤立して後背地を形成することはできない。後背地は，狩猟採集民の小さなキャンプであっても，共

住する複数の家族的集団からなっていて，そこには姻戚関係で結ばれたものも含まれている。つまり，後背地は複合的である。ストリート（を往来する人間）は，血縁（あるいは系譜），地縁，婚姻など複数の異質の原理を関連づけて，後背地を存立させ機能させるのだ。ストリートは，そもそもの始まりから異質なものをつないで1つのまとまりを生み出す。ストリートは，何かと何かを，何処かと何処かをつなぐという意味で「媒介性」を帯びている。（実際につなぐのはストリートを移動する人間であるが。）同時に，そのいずれにも属さず，かつ双方に属するという意味で「遍在する境界」「中心なき境界」だとも言えよう。ジンメルによれば，人間自身も境界を知らない境界的存在だ（ジンメル 1999: 100)。異なるもの同士をつなぐストリートすなわち媒介性を帯びた「遍在する境界」は，個的存在を超越する一種の「共的＝公的」性格を帯びる。この公性＝共性はかならずしも制度的な意味での公性＝共性ではないが，人間社会にとっての根源的な公性＝共性であるから，「基底性」と呼ぶほうがよいかもしれない。この意味でストリートは，基底性（公＝共性）と媒介性と超越性を帯び，そのことによって，独特の権威と力を潜在させることになる。社会の分化と重層化が進み，中央権力が発生してストリートを支配し，かつ他を支配する手段として用いるようになっても，ストリートは公＝共性（基底性）と媒介性を備えた空間として，中央権力を超える空間であり続ける。ストリートの基底性に対しては，その時々の中央権力（ホーム）が設定する秩序としての「公」も，ある意味では「私」的なものにすぎない。ストリートで生起する事象に関して，中央権力が，ある程度「遠慮」したり，大目に見たりする傾向があるのはこのためであろう。ストリートは内部の構成諸要素をつなぐだけでなく，境界を越えて内と外をも媒介する。こうしてストリートは集団や地域の境界を超えた共＝公性と，常に彼方を指向する開放性とを獲得することになる。「2つの集落のあいだに最初に道を切り開いた人たちは，人類のもっとも偉大な事業のひとつをなしとげたと言える」（ジンメル 1999: 91）。

〈ストリートの動態と後背地論のヴィジョン〉

ストリートは，生活空間を広げ新しい関係を作り出す人間とともに生き，社会の変化と相即して変化する。ストリートは，たえず生成し変貌し成長したり廃れたりする。社会的空間においてストリートは，水平軸にそってどこまでも延び広がり分岐するとともに，垂直軸にそっても分化し重層化する。そもそも，分化し重層化するストリートなしには，社会は分化も重層化もできない。十数人と数個の小屋からなる小さな後背地においてすら，ストリートは「重層性」を帯びている。小屋と小屋を結ぶストリート，広場と小屋小屋を結ぶストリート，キャンプと他のキャンプや森を結ぶストリート。もっと複雑な社会であれば，村落内のストリート，村同士を結ぶストリート，村々と都市を結ぶストリート，都市の裏通りと表通りなど。それらは，公性や私性や他者性とのかかわ

り方において互いに異質だ。異なるオーダー（次元）のストリートだとすら言えよう。分化し重層化した各種各層のストリートは，それぞれ独自の個性と機能を持ち，独自の経験の相を担っているから，相互に代替できない。ストリートのこの多様性多層性が生活に豊かさと活力をもたらす。有名な歴史街道や都大路だけではなく，雑草に縁取られた細いストリートすら，個性と風格をただよわせ，懐かしさすら感じさせる。それが人間の源境としてのストリートというものなのだ。

分化し重層化した社会の各部分をつなぐのもストリートである。後背地のストリート，たとえば路地は，すくなくとも原理的には，途切れることなく，獣道（けものみち）に従う踏み分け道にも，中央権力の座にも，世界の富の中枢にも通じる。近代以前においても，人類史は，緩急の差はあれ常にグローバリゼーションの過程であったとすれば，本質的に開かれたものであるストリートはまさにその過程の担い手であったのだ。今日のグローバリゼーションをストリートの観点から照射することもできよう。それはさておくとしても，文明中枢と後背地，さらにはその背後に広がる原野を，幾つもの中継点を経て「地続きで」つなぐストリートは，まさに後背地論的なビジョンの具現だ。それだけでなく，ストリートには，分化と重層化に伴う遭遇と交流と軋轢をめぐる独自の記憶が堆積する。これは，いわば後背地論的な記憶だ。ストリートの展開の跡を辿り，とりわけ，都市的中枢と後背地が出合う地点を，歩行者の目線で凝視すれば，後背地論的な認識を得ることができるだけでなく，後背地論を内的経験に転化することもできよう。こうして，ストリートは，後背地論にとって，認識の対象であるだけでなく，認識と経験の導きの糸にもなるのだ。

3.2. ストリートの習俗——ストリートを生きる

ストリートは，生活のもっとも身近な基底であるから，ストリートの習俗は，どの社会にも存在する。習俗を通して，人びとがどのようにストリートとかかわっているかを知ることができる。ここでは試みに，比較的自律的であったかつての後背地（地域コミュニテイ）の住人たち（私たちの祖先も含む）の習俗を参照してみよう。私たちのストリートへのかかわり方を映し出す鏡になるかもしれない。彼らには，自分たちが形づくり維持すべきストリートがあった。ストリートは，現代の高度産業社会に生きる私たちの場合と比べて，はるかに積極的かつ全体的にかかわるべき事柄であった。それは，「いまここ」を支えると同時にそれを超えて「彼方」を指示し「彼方」へ導き，自分たちと世界を繋ぐ超越的な存在として，精神的にも確かな存在感を持っていた。「道つくり」は共同の義務であり年中行事でもある。病気その他の悪しき力は，ストリートを通って村に侵入するから，「道切り」をして防ぐ。村内に悪しき力が発生した時にはストリートを通って村境に導いて「虫送り」をする。ストリートはある意味では村そのものであった。ストリートには神がいた。身近だが力ある存在である。たとえば，身近な

路傍で人々の生活を見守る「小さき神々」。サエの神，サイの神，道祖神などと呼ばれる道（ストリート）の神は，外部から侵入しようとする危険からムラを守ってくれるが，場合によっては災いをなす恐ろしい神でもある。この神の神像はしばしば男女一対の形をとっている。ここにも当事者たちのストリート経験とストリートのビジョンを読み取ることができる。ストリートは未知の危険ももたらすこともあれば，恵みをもたらす。また，異質なものの出会いにより何かが生まれる場でもある。この神の行事を担うのは子どもたちである。なぜ子どもたちなのか。この問いに対する答えの一つは，子どもの亡骸をサイの神が祀られる村境に葬る習俗と結びつけるものだ。はやくこの世に再生するようにとの願いを込めてのことであった（牧田 1979）。つまりストリートはこの世とあの世，村と異界の通路でもあったのだ。

ストリートと神は相性がよい。しかも，ストリートの神（道の神）はしばしば地域を超えて世界各地で共通の特性を持っていて，その特性には本書で提示するストリートのモデルと響き合う点がある。世界を見渡すと，なるほど社会の基底であるストリートは，それにふさわしい神を持っているものだ，と納得させられるような一群の神々がいるのだ。我が国のサルタヒコもその例であるが，ここでは代表として，西アフリカ・ナイジェリアのヨルバ人の神エシュに登場してもらうことにしよう（山口 1971）。エシュはヨルバの万神殿を代表する大神ではあるが，同時にもっとも身近な神でもある。人びとはエシュを門口に祀って，毎日加護を祈ってお供えをする。エシュは占い，市場，四辻，境界，ストリートの神である。一寸見（ちょっとみ）にはエシュは，暇さえあれば馬鹿げたいたずらをするしょうもない神のようだが，調べていくと次第に，果て知れないスケールの根元神であることが見えてくる不思議な神だ。ざっとした素描で紹介しておこう。まず注目しておきたいのは，四つ辻や市場をうろつく卑近な神であるエシュが，王や神々の権威を笑いものにし，いたずらでひどい目に合わせることもあるということだ。これはおそらく，彼がストリートの神であることと深い関係をもっていると思われる。エシュは，権威を笑いものにするだけでなく，秩序あるところに混乱をもたらし，平和なところに争いの種を播いて，人びとを困らせる。これだけだと，人を困らせることが専門のしようのない神にすぎないが，彼の活動をよく検討すると，隠された意味が浮かび上がってくる。たとえば，エシュは，いたずらによって争いや混乱を引き起こすが，場合によっては，それは，偽りの平和や活力を失った秩序を壊して，より深くより大きな秩序と調和を作り出すためであるようだ。実際彼は，ちょっかいを出して友人同士の仲を引き裂いておいて，後に，改めて和解の機会を仕組む。エシュは，かつて神々と人間が交流の手段を見失って，双方共に衰弱しつつあった時に，占いと供犠のシステムを発明して，意思疎通と交流を可能にして，双方を衰滅から救ったこともある。エシュは，何であれ，世界に存在するものが孤立したままでいることを好まない媒介と交換の守護神だ。恵みをもたらすにしろ災いをもたらすにしろ，エシュは片時も一箇所

に止まらない，しかもエシュの移動は宇宙大のスケールを持つ。家々の門口や市場に立ち寄るエシュは，天と地，神々の世界と人間の世界をも往還する。エシュは旅の守護神だ。エシュの活動をさらに追跡すると，宇宙の根元で働く姿が見えてくる。エシュは，時間（1日と1月と1年）と空間（東西南北の方角）の秩序を確立した。だがエシュは，自ら確立した秩序が固定することを好まず，災難や不幸を変化と再創造のきっかけとする。絶えず境界線を撹乱しては，異なる領域を混交させて，世界を再活性化する。エシュは変化と創造と偶然の神なのだ。また，常に境に住むエシュは，自分のうちで相反する二つの極を統合すると同時に変幻自在である。エシュは幼児であると同時に老人であり，また，ある時は老人，別の時には幼児と，変幻自在だ。同時に愚者であり賢者であるという矛盾もものともしない。山口昌男は，エシュを，中国の孫悟空，インドのクリシュナ，ギリシアのヘルメス，北欧のロキなどと並べて，トリックスターを見なし，境界性，両義性，媒介性，および破壊即創造の永久運動によって特徴づけた。

エシュはまさに，本章でモデル化した「ストリート的なるもの」の具現ではないか。エシュに思いを凝らすことは，ストリートについて思いを凝らすことだ。エシュは，ストリートの理解とヴィジョンと体験を深化し拡大してくれる。神を祀る人びとは，世界の端々に神の働きを見るだけでなく，自分を幾分かはその神に似せようとするものだ。エシュの神話から，人びとのストリート観やストリートとのかかわり方を幾分か推測できる。翻って私たちのストリート現象の中にエシュの働きを視ることができるであろうか。ストリートを活動の場とする人びとにエシュの分身らしきものを見出すことができるであろうか。関根は，都市の前衛としての歩道において，カミに出会っている。

「カミの前という場所は人間共同体に閉じる思考では追いつかない他性を帯びている。だから，お布施，賽銭に定価というものはない。そう考えると，「歩道寺院」は，道の端の端ないしヘテロトピア中のヘテロトピアであることがわかってくる」（関根 2005: 18–19）。

ストリート（道）のメタファーは，多くの社会で文化の諸領域に浸透して影響を及ぼすが，日本においては特にそのことが顕著である。日本列島においては，津々浦々，僻遠の地まで都の影響が行き渡り，都鄙感覚や都への憧れが広く浸透していた。しかもそこには，後背地論の観点にとって注目すべき事情があった。都の文物は，現代社会におけるように，直接急激に流入したのではなかった。都の影響は，実に多種多様な人びと，行政官，宗教者，商人，職人，芸能者，その他諸々の移動する人びとの手を経て伝えられ，幾重もの社会的フィルターを通って浸透した。しかも，文化の流れは一方向ではなかった。たとえば，僻遠の村々と宮廷や貴族の間に同じような習俗が見られるからと言って，日本では，ただちに都の習俗の伝播だと結論することはできない。その逆方向の可能性も検討しなければならないのだ。日本文明は，後背地の伝統を大きく取り入れながら，後背地的なものと「地続き」の形で展開した。日本列島の端々にまで大小の「文

化の道」が縦横に走っており，日本列島は「文化の道の束」だったのだ（山田ほか 1979）。その日本の芸能や宗教や思想において，ストリート（道）のメタファーが中心的な位置を占め，創造性を発揮し，縦横に花開いたのは，ストリートの人類学にとってもなかなか興味深いことである（上田・林屋・山田 1972）。ストリート（道）の神がポピュラーであったことにはすでに触れた。日本の神は遊行を好むとも言われる。遊行・放浪に徹することによって聖性を獲得して民衆を救った宗教者も少なくない。芸能にも乞食者（ホガイビト）の芸能のように，ストリートが交差する市場から発展した系譜がある（上田・林屋・山田 1972: 263）。

ストリートを住処とする人びとには，宗教性と芸能性を兼ね備えた人びともいたが，これらの人びとは「ストリート性」とでも呼ぶべきものを身に帯びていたのではないだろうか。「ストリート性」を帯びた宗教者，芸能者，職人など。これらの人びとは後背地やホームに背を向けていなかったし，断絶もしていなかった。異人ではあったが，ホームの住人たちと，一定のルールに基づいた持ちつ持たれつの関係を保っていた。これもまた，後背地やホームとストリート的なものの関係の１つのパターンであろう。さらに，日本人が生み出したストリート（道）のメタファーにおいては，「道」と「法」が次のように対比されていたという。「道」は自分たちが生活の中で作り上げていくものであり，「法」は上から下りてくる規範・法である。したがって，自分たちが生活の中でつかんだ伝統は神道と呼ばれ，出来上がったものとして上からくる教えである仏教は「仏法」，国のきまりは（掟）は「王法」と呼ばれるのである（上田・林屋・山田 1972: 277）。この意味で「道」とは習俗だと言ってもよいだろう。ストリートと習俗の関係についての思考を刺激して止まない事例だ。

3.3. 人間とストリート

先にストリートは後背地の存立の必然的契機であり基底であると述べた。文化的動物としての人間は関係的存在―社会的存在としてしか存在しえないのだから，これは，ストリートが人間の存立の必然的契機であり基底であるということでもある。和辻哲郎は，「人間存在のありかたを「道を歩く」イメージに仮託し[7]，人間存在の構造を論じるにあたってまず道と交通を取り上げた。人間は，ストリートを通って他者に会いに行き交流することにおいて社会的存在である。交通は，人間関係の空間的時間的構造の表現であるとともにその実現の媒体であって，その交通の仕方が固定したものが道路である[8]。

ストリートは，意味を経験する意識のレベルにおいても独特の構造を備えている。ストリート経験と呼べるような独自の経験がある。いわゆる「ストリートな経験」だ。ストリート経験は，ひとつのフロンテイアとして，さまざまな角度から究明されつつあるが，ここでは，習俗などに定式化して表現されているような部分に言及しておこう。異なるものを結んでその双方を存立させるストリート，ここととあそこ，内部と外部をつな

ぐストリートは，両義的な空間であり，両義性を経験させる場でもある。両義性の経験自体はストリートに限られるわけではないが，ストリートに独自な両義性の内容と経験がある。ストリートは，新たに切り拓かれ踏み固められることによって生まれる。ストリートにおいて人は，革新と伝統，創始（一回性）と反復を同時に経験する。あるいは，両者の関係を経験する。ストリートは反抗・逸脱が顕在化する場であるとともに，既存の秩序が示威される場でもある。ストリートにおいて人は，秩序と逸脱を同時に経験する。あるいは両者の関係を経験する。以下も同様である。ストリートは「公」の場であると同時に，「私」的なものが解放される場でもある。匿名の者たちが対等な立場で出会う場であるとともに，支配・被支配の関係の媒体ともなる。離れたものを結びつけるとともに，その隔たりをも具現する。日常的であると同時に非日常性にも開かれている。生活の場でありながら，異界の相貌をちらつかせもする。ストリートはローカルでありながら，ローカリテイを越え出る。もし希望する人がいれば，ストリートは，人間と社会におけるさまざまな両義性をめぐる思考と経験の練習場・実験場となりうるだろう。この意味でのストリートの構造と人間にとってのその根源性は，エシュがみごとに具現しているとおりだ。

ストリートはまた，他性が立ち現われる空間，他者に遭遇する空間である。ストリートは，自己を外部の他者へと導き，また外部の他者を自己へと導くだけでなく，内部に生じた他性（外部性）が「公に」顕在化する空間でもある。人はストリートにおいて，自己を自性と他性を備えた両義的な存在として経験する。ストリートは，後背地の存立の必然的契機でありながら，同時に潜在的に他性と異界性を帯びた逆説的な空間である。ほんとうは「でありながら」ではなく「であるがゆえに」と言うべきところだろう。人間にあっては，他者が自己の存立の必然的契機であるのだから，社会的経験の基盤であるストリートが，他性と不可分であるということは当然のことなのだ。

異質なもの同士が遭遇するストリートはしばしばせめぎあいの場となり，アリーナとなる。それは，不特定の観客のいる，ある意味で開かれた公的（共的）なアリーナである。そこでは，ホーム的なものとストリート的なもの，公と私，伝統と流行，秩序と逸脱，権威と反抗，などがせめぎ合う。異質な個人の趣味や主張，ことなる社会的勢力がせめぎ合う。せめぎ合いは，時に「ストリート独特の」創造性の源泉になる。ストリートは，異質なもの同士の触れ合いや交流の中で，変化の目立たない源流が芽生える場であると同時に，小さな変化の伏流を，突如として人びとを巻き込む巨大な潮流へと転化する変換装置でもある。両義性を経験する空間，他者に出会う空間，せめぎ合いと変換の装置，これらはすべて，どこのどんな小さなストリートすら潜在させている普遍的な属性だ。もしそうならば，ストリートを後背地の内なる「都市性・都市的空間」とみなすことができるかもしれない。

ここまで，主として後背地すなわち人間社会の普遍的な基盤である共住集団＝小地域

社会を念頭におきながらいて，ストリートの原型ないしモデルを探ってきた。どのような集団や社会にとっても，ストリートは共＝公性（基底性）と媒介性と超越性（開放性）を帯びた空間である。そこで人は，両義性を経験し，他者に出会い，せめぎ合いに参加する。ここでのモデルは，クリフォード・ギアツの用語を借りれば，事実に関わる認識論的な「モデル・オブ（model of）」であると同時に，「モデル・フォー（model for）」でもある。「モデル・フォー」としては，現実のストリートを診断・評価したり，それにかかわったりするために，また新しいストリートを形成したりするために役立つはずである。このような直接的な有用性とは別に，ストリートを媒体とする感性や想像力と思考力を養ううえでも，何らかのヒントになるかもしれない。

4 ストリートの可能性

4.1. 後背地を超えて——都市

ストリートは，延び広がり多様化し重層化するベクトルを秘めている。こう言えば，ストリートを擬人化しているという批判を受けるかもしれないが，本稿では仮説的に，ストリートは，それ自体として独自の属性と働きを備えているものとして話を進めている。ストリートのないところにストリートを切り拓いて維持する当事者たちの勇気や苦難の物語を忘れるべきではないし，延び広がり多様化し重層化するのは人間の活動であり社会だというのも事実であるが，それはストリートなしには不可能であるし，さらには，ストリート自体に触発されて始まることすらある。社会の動態とストリートの動態は表裏一体で分離することができない。後背地を超える地域社会＝都市の誕生もまた，ストリートに潜むベクトルと切り離すことができない。ストリートは後背地においても，異質なもの同士が遭遇しフローの側面が優越する空間である点で，もともと「都市的性質」を帯びた空間であったが，後背地を越え出て延びたストリートが交差すると，結節点に都市が生まれる。内部にストリートを高度に発達させた後背地が都市へと変貌を遂げるケースもある。いずれにしても，都市はストリートの束であり，ストリート的なものが開花する空間である。都市には後背地とは異質な空間が生まれるが，実体としての後背地と都市は互いに断絶していないし，排除し合いもしない。都市はふつう内部に活力ある後背地を含んでいる。中世ヨーロッパの都市共同体や日本の町衆のコミュニテイなどはその例だ。都市は内部にも後背地を必要とし，都市の内外の後背地は，それぞれ異なる仕方で，都市的中枢を支えている。都市が誕生すると，ストリートの多様化と重層化は大きく進むが，各種各層のストリートは，たとえば路地裏と目抜き通りのように，それぞれが依然として独自の機能をもち，経験の独自の側面を担っていて，相互に代替することはできない。都市のストリートにおいては，都市中枢的なものと後背地的なものとがせめぎ合う。長期にわたって繁栄するような都市では，そこにある種のバ

ランスが保たれていて，後背地的なものが極端に弱体化したり受け身になったりすることはない。そのようにして都市は，ストリートの世界に多彩さと豊かさをもたらし，逆にストリートは都市に活気と創造性をもたらす。ストリートは都市と文明の精華となる。

だが，そこに新しい兆候も現れる。都市的中枢の成長とともに，ストリートは，単に空間的地理的に後背地を越えるだけでなく，後背地を超える力を発揮するようにもなる。逆説的というべきか，弁証法的というべきか，すぐれてストリート的な空間である都市を拠点とする都市的中枢（あるいは権力と富のシステム）は，成長するにつれて，ストリートを支配し，ストリートを自己の栄光を誇示し他を支配するための手段とするようになる。ストリートが「ホーム的なもの」（権力とシステム）に従属するようになるのだ。ストリートの基底性（公＝共性）と超越性に注目する本章の立場からすれば，これ一種の転倒・倒錯のほかならない。そうなると，ストリートの性格にも変化が生じる。都市と都市，また都市と後背地を結ぶストリート（ロードと呼ばれることもある）においては，都市や後背地の内部のストリートと比べて，フローとしての側面が圧倒的に優勢になり，効率が至上の価値とされるようになる。主として都市と外部をつなぐストリートに起きるこの変化は，やがては都市の内部にも浸透して，都市とその内部のストリートをも変えていくようになる。（それが全般的に顕著になるのは，後に述べるように，近代にはいってからのことであるが。）全体社会が大規模化し複雑化し，権力と富が巨大化するにつれて，後背地のストリートと比べて，その外部に展開するストリートの比重が圧倒的に大きくなる。都市的中枢と後背地を結ぶストリート（幹線道路）は文明の象徴となる。「すべての道はローマに通ずる」「すべての道はローマに発する」。都市的中枢と後背地を結ぶストリートが全体社会において発揮する産出力，創造力，変形力，破壊力も次第に増大する。この傾向は近代文明において決定的になる。もちろん，ストリートの基本的な性格が全面的に失われるわけではなく，特に，歩行空間としてのストリートにおいては，生身の人間とその生活がかかわるせめぎ合いの中で，ストリートの基本的な性質が保持される傾向はあるが。

4.2. ストリートの変容——近代

〈システムの制覇？〉

文明のストリートに生じた変化を決定的に押し進めたのが国家と市場経済とテクノロジーの三位一体を柱とする近代文明である。近代文明は，後背地に直接かつ全面的に介入するが，ストリートはその尖兵としての役割を果たしつつ自らも変質していく。国家と市場経済の要請に応えるストリート網は，インフラとして計画され建設される。システムによって計画され建設されるストリートは，しばしば，後背地の世界にほとんど暴力的に介入して，それを一挙に変えてしまう。1本の幹線道路の開通が，地域社会相互の関係を大きく変えるように。これは近代システムが公共性を僭称してストリートを私

物化することではないのか，全体社会にとっては転倒・倒錯の蔓延ではないか。後背地論の立場からはこう問いかけざるをえない。近代システムが仕切るストリートに対して，後背地はいかにも受け身で無力である。少なくとも今のところそのように見える。だが，ここで忘れてならないのは，近代的ストリートは後背地に介入して変化させるだけではなく，自身も大きく変貌しつつあるという点だ。近代のストリート網の主役に躍り出て，ますます増殖し続けるのは自動車や電車，特に自動車である。その象徴は，諸大陸を縦横にめぐる高速道路網や混雑の度を高める都市の車道だけではない。後背地論的な観点にとっては，後背地の中，住宅地の中すら縦横に走る歩道兼車道も無視できない。ストリートの主役はもはや歩行者ではなく車だ。車は（国家，産業，テクノロジーによる）計画と手を携えて，ストリートの画一化と単層化を大きく押し進める。各種各層のストリートは，それぞれ独自の機能を持つとともに経験の独自の相を担っていて，相互に代替できないのだが，近代車社会は，強大な力によって，ストリートを単層化し単純化していく。フローの側面を肥大化していく。

システムの専横がもたらすストリートの変化に目を奪われるあまり，忘れられがちなことが1つある。それは，私たちの多くが生活の中で共有し生きている感性や考え方の変化だ。ストリートの習俗の変化と言ってもよい。ストリートの多様性や重層性はそれ自体としては，人びとの意識と生活においてもはや別段大きな意味や価値を持たなくなっているのではないか。（ここではしばらく日常の暮らしに話を限って，観光のことなどは脇へ置いておく。）たとえば，古い家並みに沿った2車線の舗装道路。歩行者用の白線すら引かれていないそのストリートをひっきりなしに車が疾走する。これは，今日ではもっともありふれた光景と言ってよいであろう。また，後背地に介入する近代的なストリート網に対して，後背地に根拠をもつ自生的なストリートはいかにも影が薄い。私たちは，意識的にはどうであれ結果としては，そのことを受け入れている。車も車道も必ずしも外部からの介入とは言えない。人びとは車を日々の生活の一部として受け入れた。「消防車も救急車も入れないでは困る」。だが，それだけではない。1戸に2台以上の車ということも今や珍しくない。必要に強いられてそうする人もあれば，快適な生活を求めてそうする人もいる。いずれにしても，今日の平均的な「生活の仕方」（習俗）に注目すると，「ストリートを仕切る近代システム」という観念は，間違ってはいないが，いささか紋切り型に思えてくる。近代的なストリート網を生み出し根底において支えている諸事象の，言い換えれば，ストリートの近代的変質を押し進めている諸事象の複雑極まりない絡み合いの中には，私たち自身も含まれているのだ。

文明社会にあってはストリートの歴史は都市と切り離すことができない。ストリートが都市を誕生させたとも言えるし，ストリートの歴史を新しい段階へと押し進めたのは都市だとも言える。元来都市はストリート的なものが花開く場所であり，それ自体がストリート的なものの成果であった。言うまでもないことであるが，近代化は都市化と相

携えて進展する。現在，都市的環境は恐ろしい勢いで広がりつつある。ところが，世界の大半が都市化しようとしている現在，私たちは逆説的な事態に直面している。それは，都市化の進行自体が「都市的なもの」を衰退させ，都市とストリートを変質させるという事態だ。近代的な都市化が都市を食いつぶす？あるいは，都市化自体のパラドックス？　たしかに，「都市的」環境は止め処なく拡がりつつある。だが少なくとも日本の場合，そこで私たちが目にするのは，既存の都市のイメージにも村落のイメージにも当てはまらない新しいタイプの空間だ。それは「郊外」と呼ばれることもある。それは実は，システムが後背地を食いつぶしつつあることの現れでもあるのだが。そこではストリートも独特の相貌を帯びている。雑踏でもなく，路地でもなく，都市的なものの粋が遊歩者を誘う目抜き通りでもない。と言っても，もちろん原野の一本道と言うわけでもない。郊外だけの話ではない。後背地的な集落においても都市の内部においても，ストリートは変質しつつある。都市化自体が逆説的な現象なのか。それとも，近代システムの原理を貫徹すること自体がシステムの基盤を掘り崩すという必然があるのか。こうしたことのかなりの部分は，システムが後背地を食いつぶしつつあることの現れとして理解できるというのが，後背地論の立場である。

ストリートの近代化が一筋縄ではいかないことは次のような点にも現れている。近代の主要ストリート網はシステムによって上からの視点で計画され建設されるが，原理上，ストリートを一元的な観点から計画し設計しつくすことはできない。現実のストリートの多くは，いわゆる「政治道路」などに明かなように，テクノロジーとは直接関係のない無数の事象の絡み合いの中で生まれるのだが，それだけではない。ストリートはそもそも，物理的構築物として自己完結できないものだ。ストリートはハード面とソフト面からなっている。ハードは計画し設計できるが，ソフトを全面的に予め計画しきるということはありえない。ソフトとしてのストリートは，さまざまな影響とせめぎ合いの中での，競合・調整・試行錯誤の成果として形成される社会的歴史的「作品」なのだ。ストリートは面白いもので，沿道のファサード１つ，並木の１本が変わっても，そこを移動する人びとの種類や習俗が変わるだけでも，表情を変える。そこではシステムを背後に持つ計画も，この総合的「作品」を生み出す１つの契機でしかない。都市とストリートが，計画の手を逃れて変貌することについて，磯崎新は最近，計画者設計者として次のように述べている。「現代都市はもはや建築家が計画通りにできる時代ではない。均質化の波が世界中の町を洗う中で，東京・秋葉原のような独自の空間が自然発生する。古事記の天地初発のイメージを借りれば，これは「島都市」だ」（日経新聞 2008.6.2）この場合「自然発生」とは何を意味するのか。「自然発生」とはどのようなプロセスなのか。人類学的な見方からすれば，そのようなプロセスこそがストリートの本来のあり方として，探究の対象になる。

磯崎は秋葉原を例に出しているが，事は秋葉原に限らない。同じような状況は，スト

リートが歩行者や後背地（の生活）とかかわるところでは，どこでも多かれ少なかれ見られる。そこでは，近代システムや計画は，自分とは異質な何かに遭遇する。システムや計画の論理では把握しきれないことが生起する。生身の人間や後背地が果たす役割という面からとらえることもできようし，ストリート自体の可能性の発現という面からとらえることもできよう。システムと自生的秩序がせめぎ合う場と見なすこともできよう。いずれにしても，それはある意味で開かれた場であるし，未知の何事かが生じつつある場であるから，現場に身をおいて観察をしなければ事態を把握できない。

〈後背地・ホーム・ストリート〉

今日では，いわゆるストリート現象や「まちづくり」,「まちおこし」などへの関心は高まっているが，本章で言う意味での後背地，つまり，文化的動物としての人間の再生産装置としての地域コミュニテイに言及されることはあまりないようだ。後背地論の立場からすれば，生身の人間とその生活が参入する等身大の多様なせめぎ合いの場こそ，ストリートの先端であると同時に原点なのであるが，そこでいま，システムと後背地の関係をめぐって，どのような事態が起っているのだろうか。

ストリートにおいて近代システムと後背地がせめぎ合う。その主たる舞台は，歩道と車道の関係，歩行者と車の関係だ。近代以前の社会においては，システムと後背地のせめぎ合いにはある程度均衡がとれていて，後背地内部のストリートや，後背地とストリートの関係には，長期に亙って比較的変わりにくい部分があった。ところが近代に入ると事情が変わり，近代システムは，後背地に全面的に直接的に圧倒的な力で介入して，後背地やストリートを急激に変化させるようになった。この趨勢に対しては，後背地の側からに異議申し立てや反抗もあったが[9]，後背地は次第に弱体化し受け身になり，当初の異議申し立てや反抗は次第にゲリラ的になり，近代化の趨勢は加速しつつ進展している。

後背地論の観点から，日本の場合を念頭に，近代化の過程を思い切って簡略に図式化してみよう。近代システム（国民国家，市場経済，テクノロジー）と近代イデオロギーは，後背地に直接介入して機能を低下させる。後背地の機能が低下すると個々のホームは孤立する。近代システムは，孤立したホームの核家族化を押し進めて，ホームを閉鎖的で孤立した社会単位に仕立てるだけでなく，さらに，核家族内部にも自己の論理を貫徹させて，ホームを個人へと解体する。この過程でストリートにも変化が生じる。まず，後背地とストリートの関係が弱まる。後背地は，ストリートを形成し維持し管理する機能を行政に譲る。ストリートは，末端に至るまでシステム（行政とテクノロジー）によって計画され建設され，維持整備される。後背地は受け身だ。要求は出すかもしれないが，形成や維持に積極的にかかわることはない。後背地が，自己の基底であるストリートとの関係をいわば手放そうとするのである。一方ストリートのほうはどうなるか。後背地

が弱体化するとホームとホームの関係が希薄になる。それにともなって，ホームとホームを結んで後背地を支えるというストリートの役割は相対的に小さくなり，各ホームを直接後背地の外部と結ぶ役割の比重が大きくなる。ふつうの住宅に住む人にとっても，大邸宅や城館に住む人と同様に，日常生活においては，ストリートは，外部との通路としての意味しか持たなくなる。できるだけ集落から離れようとするロードの性格が，幾分か生活道路にまで及びつつある。ストリートは末端においてすらフロー（移動）のための空間としての性格を強め，効率が強調され，ストリートに滞在すること自体の意義が認められず，後背地の中においてすら生活の場・生きる場としてのストリートが次第に見失われつつある。それと同時に，ホームはストリートに対してそれまでよりも閉ざされたものになる。かつての相対的に自律的な後背地に広く見られたホームとストリートの連続・非連続の「ほどよい」関係は失われるようとしている。しかも，閉ざされたホームの内部で，関根が指摘するように，ホームのストリート化とでも呼ぶべき現象が生じ始める（関根 2007）。互いに異質な空間としてのホームとストリートの「ほどよい関係」（適切な関係）がほころびを見せ始めたということだ。こうした変化の底に世界のストリート化（関根 2007）とも呼ぶべき大きな潮流が動きつつあるのかもしれない。

この構図の中に今日のいわゆる「ストリート現象」を置いてみよう。肥大化する近代システムは，後背地もホームもストリートも変え，さらにそれにともなって，これら三者の関係も変える。だが，そのような変化の中にあっても，生身の歩行者がかかわるところでは，システムの計画から逸脱したり，計画とは無関係な雑多な現象が生起し続けるというのもまた事実だ。人が群れるところでは，古来からのストリートの機能の一部が維持されている。そこで行われるのは，日々の暮らしのルーテイン化された移動だけに止まらない。遊歩，観光，種々のパフォーマンス，ストリート・ファッション，ストリート・ファイト，ストリートチルドレン，路上生活者，ストリートギャング，祭礼の行列，カーニバルの行列，デモ，叛乱，戒厳令下の戦車……。そこには，解放感や忘我や出会いや楽しみがあるが，不安や孤独や混乱もある。逸脱や危険もある。ストリート（路上）だけが与えてくれる経験がある。ストリートの本性に由来する媒介性や開放性（超越性）が働いたり，システムの公性とは異なるストリートの共＝公性（基底性）の片鱗が立ち現れることがあるかもしれない。このこと自体はこれまでにもしばしば指摘されてきたことであるが，改めてシステムと後背地の関係に焦点を当てると何が見えてくるのだろうか。

今日のストリート現象は，ある意味では，近代システムの産物だ。国家や産業のデモンストレーションそのものもあれば，システムの産物でありながら，（広義のホームとしての）システム[10]に居場所を見つけることのできないものが，共＝公的空間としてのストリート（路上）にあふれ出る場合もある。そこにはまた，近代システムによって変質させられた後背地やホーム（家族）が分泌したものも少なくない。後背地やホームに

居場所を失った個人や活動がストリートに押し出される。あるいは，ストリートへと脱出する。解体の危機にさらされる後背地とホームの矛盾や包容しえないものや排除したものが，生存のために，あるいは逸脱や過剰としてストリートに露出し展開する。しかもそれらは，ある意味では後背地やホームと敵対したり断絶したりしていて，後背地とホームは，ストリートに展開するものとうまく交渉したり，コントロールすることができない。あるいは，その意志もない。ストリートをコントロールするのはシステムだ。システムは一方ではそれらを，産出し増殖させ続けながら，他方では，商品化しようとしたり，管理（コントロール）しようとする。いずれにも適合しないでシステムを脅かすものは排除する。ここでは，ストリートの，システムに属するという意味での公性と，システム超える意味での共＝公性をとの関係が曖昧だ。後背地の位置づけや役割も曖昧でマイナーだ。少なくとも表面的には，前景から退いていて，せいぜいのところ脇役でしかない。ただし，ここで１つ確認しておきたいことがある。今日のストリート現象との関連で，後背地とホームは，ある意味ではたしかに脇役に過ぎないが，自らの抱える矛盾の産物や自らのうちに居場所を失くしたものをストリートに排出するという点で，ストリート現象を供給し続けているとも言えるのだ。後背地やホームがシステムの介入によって弱体化し孤立したがゆえに生み出したものがストリートを活性化するという逆説的な構図がここにも見られる。今日ストリート現象への関心は高く，研究も多いが，都市のストリートを逸脱的に流用する人々と行政や資本のせめぎ合いが好んで取り上げられ，ストリートでの活動とシステムと後背地の三つ巴の関係はあまり注目されない憾みがある。そればかりか，むしろ後背地（地域コミュニテイ）あるいは共同体的なものからの離脱こそが称揚されている気配すらあるように思われる。

4.3. システムを超えて——ストリートの可能性

それでは，現代のストリートの物語は，システムの制覇ということで完結するのだろうか。幸か不幸か，事態はそう単純ではない。前節で見たように，システム・計画のパラドックスや限界が露呈するところ，歩行者や生活と接するところ，それがストリートの原点であり前衛の場である。この原点＝前衛の場において考えるために，本稿では，あえて，ストリートとの関連ではあまり言及されることのない後背地と習俗という視点を設定してみた。後背地と習俗という視点を持つことで，後背地やホームとストリートの関係を主題化することができ，また，ホームに住む者の日常の視点と人類史的な文脈とを重ね合わせることもできる。後背地論の立場からすれば，都市的中枢を拠点とする文明システムは，「文化的動物としての人間」を再生産できないがゆえに本質的に自足できない。この点において，後背地はシステムを超える。都市的中枢と後背地を結んでシステムを支えるストリートは，両者の関係を具現すると同時に，両者を超える「なにものか」をも体現する。この意味での「ストリート的なもの」に触れることができるの

は，まずもってストリートが歩行者や地域の生活と密接にかかわる原点＝前衛の場においてである。現代におけるストリートの共＝公性（基底性），媒介性，開放性（超越性）の動向（現れ）を見定めることができるのも，ストリート経験とも呼ぶべき独特の経験をすることができるのも，そこにおいてであろう。この意味での「ストリート的なもの」が，後背地的なものに根ざす自生的な秩序の重要な部分として，システムとは異質なものとして，それと拮抗すること。ストリートの可能性の一端はそこにある。ストリートをめぐる目下の状況では，現実の後背地は多くの場合，少なくとも表面上は，受け身の脇役に過ぎないように見えるが，水面下で逆説的に「ストリート現象」かかわっている。それとは別に，日本の至るところで，地域コミュニテイ（後背地）は，「まちづくり」や「まちおこし」などの形で積極的にストリートとかかわり始めている。現在までのところでは，本章で考える「ストリートを生きる」こととどのような関係を持つのかはっきりしないが，ストリートにおける風土や歴史の再評価や観光客との出会いは，ストリートのあり方に新しい可能性を開くかもしれない。また，最近では，地域コミュニテイが落書きなどのストリート現象に正面から取り組むと，行政・警察の管理や取締りとは異質な方法が見いだされ，事態がそれまでとは別の仕方で展開することを示す興味深い研究が現われ始めた[11]。後背地論の観点からすると，大きな可能性を秘めた動きのように思われる。システムがあまりにも強力で，変化があまりにも急激であるがゆえに，また，近代イデオロギーの影響下にあるがゆえに，現代人の視野は狭まり近視眼的になっていて，「後背地的なもの」の性質や潜勢力を見失いがちだ。この点を自覚することは，ストリート現象の研究においても有効である。

現代のストリートについて考えるためにとり上げたいもうひとつの視点は習俗だ。習俗とは，人びとが，日々の暮らしの中で隣人たちと，あるいはもっと広く同時代人と共有する生き方だ。本稿の文脈では，ストリート観やストリートとのかかわり方，つまり「ストリートの生き方」だ。私たちは，ストリート「によって」生きる。これは，手段としてのストリートだ。ストリート「で（において）」生きる。つまり，ストリートは生の舞台でもある。さらに，私たちはストリート「を」生きる。ストリートを経験し，ストリートを媒介として想像し思考し表現する。人間的「生」の基本的構成要素であって，かくも変化に富み，変幻するストリートを私たちは，日々の暮らしの中で，どのように生き，どのように表象しているだろうか。ストリートの工学やストリートの哲学的考察や文学や絵画はある。現実のストリートを演劇に組み込む試みなどもある。だが，生活の場で共有されるかかわり方としての「ストリートの習俗」についてはどうだろうか。こう自問してみると，自分たちのストリート観も，ストリートとのかかわり方も，どこか曖昧なことに気づく。先にその一端を紹介したように，世界各地に豊かで多様なストリートの習俗があり，それらは，人間とストリートについての深い洞察と実践を含んでいる。それらの習俗は，私たちに「ストリートをどのように生きているのか，どの

ようなストリートの習俗を持っているのか」と問いかけて，近代において変容したのはストリートだけではなく，ストリートを生きる私たち自身の生き方でもあるのだということに気づかせてくれる。試しに考えてみよう。私たちは，身近なストリート現象の中にエシュのような力の働きを視るだろうか。ストリートを活動の場とする人びとにエシュの分身らしきものを見出すだろうか。もし見ないとしたら，それとは別の何を見ているのであろうか。ストリートの認識と実践においてさまざまな新しい試みがなされつつあるとはいえ，私たちの思考は依然として，ストリートの近代的な変容をもたらしたシステムとイデオロギーに絡めとられているのではないだろうか。後背地と習俗の広大な地平と身近なストリートの原点＝前衛の場を相互照射することは，私たちの曖昧なストリート意識のあり方を映し出すとともに，近代的な観点とは別の観点を導入してストリートをめぐる認識と実践を一歩進めることに何がしか寄与すると思われる[12]。

5 おわりに

現代社会では，後背地もストリートも近代システムの圧倒的な影響下にあって独自の様相を呈している。ストリート本来の意味や機能のある部分が，見失われているようにも思われる。しかし，注意深く観察すれば，ストリートの本来的な意味や機能がいまなお潜在していることを示す機会や場所がないわけではない。ストリートの人類学は，そうした機会や場所に赴いて，そこで現実に起こりつつあることと直接に向き合う。各レベルの地域社会と人間にとってストリートが持つ多面的な意味の認識をさらに深めること，そして，ストリートが共―公性，媒介性，超越性をよりよく発揮し，両義性や他性や創造の場であるために何が必要かを明かにすること。ストリートの人類学のこれらの課題はきわめてアクチュアルである。ストリートの人類学による記述分析は，このアクチュアルな課題に人類史的な文脈において取り組むことを助けるだけでなく，現代人のストリートの生き方（感受性，体験，思想，習俗など）やストリートへの実践的かかわり方を，広い社会的な文脈な中で主題化することにも繋がるだろう。

注

1) 本稿では，「ストリート」という語を，街道，街路，路地などを含むものとして広義に用い，それらすべてに通じる「ストリート的なるもの」を考察の対象にする。
2) 棚橋訓，民博共同研究会「ストリートの人類学」第 8 回共同研究会（2006 年 6 月）の報告による。
3) 後背地について以下に述べる内容は，すでに他のところで述べたことと重複するが，読者の便宜のためにここでも改めて述べることにする（阿部 2007）。
4) 国民国家，市場経済，テクノロジーの複合（近代システム）を核とする文明を近代文明と呼

ぶ。「近代」と「現代」の関係については，「現代」を「後期近代」とみなす立場に立つ。現代においても近代システムは，変化しつつも依然として文明の核をなしていると考えるからである。

5) ホームは，広義には，囲われ覆われて他から区別され守られている活動空間で，建築や建物とほぼ同義である。権力やシステムは，この広義の意味で「ホーム的なもの」と見なす。ホームは狭義には，家族的集団の生活の場で，住まい，家，住居などと同義である。ストリートの人類学においては，ストリートとホームの関係が研究課題になる。また，ストリートとホームの理解が互いを深め合うことが期待される。

6) ホームとストリートの対比に関しては，ジンメルの扉についての考察が示唆に富んでいる。彼によれば，私たちは，無限の空間の内で私たちに割り当てられた部分を有限の統一体（ホーム）へと結びつける。扉は，この統一体（ホーム）をあらためて無限の空間へと，たえざる相互交換の可能性として結びつける。そして，扉が直接に結びつけるのはホームとストリートなのである。

7) 和辻（2007: 412），熊野純彦による注。

8) 和辻は，道（ストリート）を，人間存在の根源的な空間性時間性（空間性と時間性の相即）の現われであると同時にその実現の媒体であるととらえているのである。「もっとも単純な交通において示された人間関係は，単に主体的なひろがりであるにとどまらず，過去と未来との現前における統一としての時間的構造をもつものである」（和辻 2007: 276）。

9) 小田亮（2007: 7–8）。

10) 注 5 参照。

11) グラフィティ対策に取り組む地域コミュニティを取り上げた吉見俊哉・北田暁大編（2007: 241）など。

12) 関根は，これとは別の文脈においてだが，一見習俗とは馴染みにくそうな現代都市のストリートについて次のように述べている。「近代のパラダイムが覆い尽くしたかに見える権力空間（都市）に，他性への顧慮で成り立っていた前近代からの民俗知のパラダイムでないと正しく了解できない現象が，現実に現出している……」（関根 2005: 19）。

文　献

阿部年晴

2007 「後背地から……」阿部年晴・小田亮・近藤英俊編著『呪術化するモダニティ――現代アフリカの宗教的実践から』pp. 349–390，風響社。

磯崎　新

2008 「社会を前へ進める」『日本経済新聞』6 月 2 日。

小田　亮

2007 「ストリートを取り戻す」『民博通信』116: 7–8。

関根康正

2005 「ケガレから都市の歩道へ『〈都市的なるもの〉の現在――文化人類学的考察』を編んだ後で」『UP』10 月号。

2007 「ストリートという縁辺で人類学する――「ストリートの人類学」提唱」『民博通信』116: 2–6。

ジンメル，G.
1999 『ジンメル・コレクション』北川東子編訳，鈴木直訳，筑摩書房。
林屋辰三郎・上田正昭・山田宗睦編
1972 『日本の「道」――その源流と展開』講談社。
牧田　茂
1979 「道の民俗，旅の民俗」山田宗睦ほか『道の文化』pp. 99–138，講談社。
山口昌男
1971 『アフリカの神話的世界』岩波書店。
山田宗睦ほか
1979 『道の文化』講談社。
吉見俊也・北田暁大編
2007 『路上のエスノグラフィ――ちんどん屋からグラフィティまで』せりか書房。
和辻哲郎
2007 『倫理学（一）』岩波書店。